

ラテン語とフランス語

古典作品を素材に [9]

ブルガータ訳聖書「ヨハネ福音書」より — 態と時制 —

秋山 学

今月は、再びブルガータ訳新約聖書の「ヨハネ福音書」からテキストを選ぶことにしましょう。今回取り上げるのは、受難に先立ってエルサレム入城を果たしたイエスの許に、数人のギリシア人が訪ねてきた後のイエスと群衆のやり取りです（仏訳は「フランス聖書協会訳」から借用しました）。母音には適宜、長音符号を付してあります。

原文 « Nunc anima mea turbāta est. Et quid dīcam ? Pater, salvificā mē ex hōrā hāc ? Sed proptereā vēnī in hōram hanc. Pater, glōrificā tuum nōmen ! ». Vēnit ergō vōx dē caelō : « Et glōrificāvī et iterum glōrificābō ». Turba ergō, quae stābat et audierat, dīcēbat tonitruum factum esse; aliī dīcēbant : « Angelus eī locūtus est ». Respondit Iēsus et dīxit : « Nōn propter mē vōx haec facta est sed propter vōs. Nunc iūdicium est hūius mundi, nunc princeps hūius mundi ēiciētur forās ; et ego, sī exaltātus fuerō ā terrā, omnēs traham ad mēipsum ». Hoc autem dīcēbat significāns, quā morte esset moritūrus.

仏訳 « Maintenant mon cœur est troublé. Et que dirai-je ? Dirai-je : Père, délivre-moi de cette heure de souffrance ? Mais c'est précisément pour cette heure que je suis venu. Père, donne gloire à ton nom ! » Une voix se fit alors entendre du ciel : « Je l'ai déjà glorifié et je le glorifierai de nouveau. » La foule qui se trouvait là et avait entendu la voix disait : « C'était un coup de tonnerre ! » D'autres disaient : « Un ange lui a parlé ! » Mais Jésus leur déclara : « Ce n'est pas pur moi que cette voix s'est fait entendre, mais pour vous. C'est maintenant le moment où ce monde va être jugé ; maintenant, le dominateur de ce monde va être chassé. Et moi, quand j'aurai été élevé de la terre, j'attirerai à moi tous les humains. » Par ces mots, Jésus indiquait de quel genre de mort il allait mourir.

訳 「いま、わたしのところは乱れている。何と言おうか？《父よ、この時からわたしを救いたまえ》だろうか？だがこの時のためにこそ、わたしは来たのだ。父よ、あなたの名に栄光を授けたまえ。すると天から声がした。「わたしはすでに栄光を授けた。再度栄光を授けよう」。そ

れゆえ、立って聞いていた群衆は「雷鳴が轟いた」と口々に言い合った。また他に、こう言う者もあった。「天使が彼に語り掛けたのだ」。イエスは答えてこう言った。「この声が出したのは、わたしのためではなく、あなたの方のためだ。いまやこの世に対する裁きが行われ、いまやこの世の支配者が外に追い出される。そしてわたしは、この地上から挙げられたならば、すべての人々をわたしの許へと引き寄せせらるう」。イエスがこう言ったのは、自分がどのような死をもって死ぬはずであるかを表したのである。（「ヨハネ福音書」12,27-33）

「わたしは、この地上から挙げられたならば、すべての人々をわたしの許へと引き寄せせらるう」の一節、神学的には無限の深さを秘めた箇所ですね。それはともかく、この一節は、「ブルガータ訳」を記したヒエロニムス(340-420)が、後期ラテン散文の語法を垣間見せた部分として注目されると思います。この箇所、ラテン語テキストでは「sī exaltātus fuerō」となっていますが、このような動詞の活用形は、キケロなど古典期の著作家では見られません。分析すると、exaltātus「挙げられた」は exaltāre（「高くする」；1人称単数現在形は exaltō）の完了受動分詞・男性単数主格形でイエスを修飾する一方、次の fuerō は、この語形だけを取ってみると esse（be 動詞に相当、1人称単数現在形は sum）の直説法能動相未来完了1人称単数形、ということになります。ただし、この部分は受動態の構文（「挙げられた」）ですので、別の考え方が必要です。

ラテン語における受動態の動詞活用は、直説法だけに限定すれば、能動態の活用形と同じく6つの時制を含んでいます。それは「①現在・②未完了過去・③未来」：「(1)完了・(2)過去完了・(3)未来完了」の6つで、前3時制を「未完了系」、後3時制を「完了系」と総称します。受動態に関しては、未完了系の3時制であれば動詞の単独活用形で表現できるのに対し、完了系の3時制は、be 動詞に相当する esse を未完了系3時制に活用させたものに完了受動分詞を加えた複合形で表します。この際 esse が現在【①】に活用すれば、完了受動分詞を加えた複合形としては受動態の完了【(1)】形を表す、というふうになり、上の①と(1)、②と(2)、③と(3)が各々対応することになります。

したがって、受動態構文の定形動詞としての esse は、古典期の文法では未来完了形に活用することはありません。あくまでも「未来」+完了受動分詞で「未来完了」を表すはずですが、しかしこのテキストでは、定形動詞 fuerō がすでに未来完了形になっていて、このことは、「完了受動分詞」であるはずの exaltātus の「完了」性が、すでに意識されなくなっていることを示していると言えましょう。ロマンス語には、ラテン語の完了受動分詞起源の形容詞が数多く見られますが、その「完了」性は、このように古代末期の時点で、すでに失われていたことがうかがえます。

(あきやま・まなぶ)